

異世界に飛ばされた
Where is Gassan going in
another world?
おっさんは
何処へ行く? 5

シ・ガレット
cigarette



目次

第①章

タクマ、人外になる……………007

第②章

生産国アムスの罪……………067

第③章

パミル王都 孤児院崩壊……………213

主な登場人物



タクマ

異世界に飛ばされてきたおっさん。趣味を楽しみながら異世界を旅する。



リンド

タクマの守護獣となった火竜ジュードの母親。体の大きさを自由に変えられる。



コラル

タクマの尻拭いばかりさせられている領主。お酒好き。

リュウイチ

召喚されてきた日本人一家の旦那さん。職人系のスキルに適性がある。



タイヨウ

召喚されてきた日本人一家の赤ちゃん。人懐っこい。



ミカ

召喚されてきた日本人一家の奥さん。農業系のスキルに適性がある。

タクマの仲間達



ヴァイス



ゲール



アブダル



ネーロ



ジュード



ブラン



レウコン



ナビ



アルテ



ヴェルド



第①章

**タクマ、
人外になる**



1 神の怒りと宣言

日本から異世界ヴェルドミールに飛ばされたおっさん、タクマ・サトウ。神々から遣わされた守護獣である、狼のヴァイス、虎のゲール、鷹のアフダル、猿のネーロ、そして火竜リンドから託された幼竜ジュードと共に、彼は当てもない旅を続けていた。

そして、新たな守護獣である兎のブランと蛇のレウコンと合流した彼は、更なる厄介事に巻き込まれつつ、各地で孤児達と身寄りのない者達を保護していった。

ひよんな事からタクマは、鉱山都市トーランから離れた場所にある湖畔^{こはん}一帯の土地をもらい受ける。

そこで家族と共に新生活を始めたのだが、そんな矢先――

近くの森で、衰弱した赤ん坊を保護する。赤ん坊を包んでいたおくるみが地球の物だと気づいたタクマは、ヴェルドミールの神であるヴェルドの元へ赴き、衝撃の事実を知る事になった。

タクマが保護した赤ん坊――タイヨウは自分と同じ日本人であり、両親と共に魔法国家マジルによつて召喚されたのだ。

あろう事か、戦争の兵器としてである。

タイヨウの両親が未だマジルに捕らえられたままだと知ったタクマは、すぐにマジルへと向かう。そこでタクマが目撃したのは、マジル王が女性に乱暴をしている光景だった。

とっさにマジル王を撃ち殺したタクマは、城内の騎士を戦闘不能にしたうえで、タイヨウの両親であるリュウイチとミカ、そして被害に遭っていた女性を救出。その全員を、湖畔で保護する。

救出劇も終わってゆつくりと新生活を考えていたタクマだったが、彼に休む暇はなかった。マジルの騒動の事で、パミル王からの呼び出しを食らってしまったのだ。



タクマは深呼吸をしてから、説明を始める。

謁見の間には、トーランの領主コラル・イスル、パミル王国宰相^{ざいしょう}のザイン・ロットン、そしてパミル王がいた。

彼らは初めから、難しい顔をしていた。そして、タクマがマジル王を殺害した事を話したところで、パミル王が話を止める。

「待て！ 王の殺害はタクマ殿がやったというのか？」

「そうですね。赤ん坊の両親を助けたら王は痛めつけるだけにしておくつもりだったのですが、やりにもよつて女性に乱暴をしていました。なので、彼女を助ける必要もあつて処刑したんです。

も俺がやった事は、王を殺して、城を強襲、騎士達を倒し、禁術の魔法陣を破壊しただけ。城を消し飛ばしたりはしていません」

タクマが自分のやった事を正直に話すと、三人は黙り込んでしまった。

タクマはしばらくその様子を見てみると、張っていた結界に干渉される感じを覚える。ただ、干渉してくる力が、タクマも知っている者の仕事しごとという事はすぐに分かった。

王の前に光の粒が集まり始める。タクマは驚く三人を安心させ、光が落ち着くのを待った。

そこには、いつもの穏やかな雰囲気ヴェルド——ではなく、厳しい表情をした彼女が立っていた。

『私はこの世界の神であるヴェルドです。私の声が聞こえている者は、今からする話をしっかりと聞きなさい。私の姿は、この世界すべての国の王の前に現れています。今回、魔法王国マジルで起こった事は、私が行った神罰しんばつです。あの国は禁忌魔法きんぎぼうを使い、世界に危機を招くところでした。よって、私の力で関係者全員を断罪しました。すべての国の長に警告おそします。禁忌魔法・禁術は只今を以て解析・研究・利用を禁じます。今まで研究した資料などもすべて破棄してください。一週間の猶予ちゆうよを与えます。来週のこの時間までに今言った事を実行できない場合、関係者全員を断罪する用意があります。禁忌魔法・禁術は世界に危機を招く危険なもの。只人に使えるものではありません。いいですか？ この忠告をいざらだと流すのも自由ですが、それが自分達の首を絞める事になるのを理解してください。私の世界の者達を断罪するのは、私も嫌なのです。どうか私の言葉

を聞いてくれるように願います』

終始厳しい表情で警告を与えたヴェルドは、来た時と同じように光と共に消えていった。

しばらくその場を動けなかった三人が、ようやく再始動する。

まず王が口を開いた。

「タ、タクマ殿。あ、あの方は……」

「ヴェルド様で間違いないですね」

「何故、ヴェルド様だと分かったのだ？ 君はヴェルド様の神徒しんとなのか？」

「どうやら王は、タクマを神の使いか何かだと思っっているようだ。」

「違います。確かに俺はヴェルド様を知っています。ですが、神徒ではありません。俺はこのヴェルドミールに飛ばされてきたのです。そのお陰で、神であるヴェルド様と面識があるだけです」

タクマは神徒だという事は否定したが、ヴェルドと面識があるのは否定しなかった。

「だ、だが、あの方は君がやったと言っていた事も、自分がやったと断言されていた」

「それは、俺を庇かばってくれたのかもしれないが……ともかくマジルが使用した魔法は、俺の故郷にも影響を与えたいです。ヴェルド様が怒ったのも当然です」

タクマは絶対秘匿ひかくを条件に、隠していた召喚魔法の事も説明した。

「な、なんと……マジルは禁忌魔法の召喚を使ったのか……」

「ええ……そのお陰で召喚された彼らの人生は狂わされました。しかもちよつとも間違えば、赤

ん坊は死んでいたのです」

タクマはそう言いながら、再び怒りを露わにしていく。

「この世界の人間がいくら戦争しようとな勝手だが、俺の故郷で幸せに暮らしていた家族を強制的に引つ張ってきたのは許せない。そんな奴らは死んで詫びるべきだ」

「う、うむ。確かにタクマ殿が怒るのは分かる。だが、その殺気は抑えてもらえないだろうか？」

思わず殺気を洩らしてしまっていたタクマは、深呼吸をして心を落ち着ける。

「事情は理解した。先ほどの警告もしつかりと実行する事にしよう。パミル王国は今後、禁忌魔法・禁術が封印されている遺跡などの調査は放棄する。専門家達とはすべて厳しい契約を結ばせ、情報を洩らさない」と約束しよう」

「ありがとうございます。俺もこの国に神罰が下るのを見たくはないですから。王の英断に感謝します」

「う、うむ。それでは今日の話し合いは終わりにしよう。今から動かねばならん事もできたのでな」

無事に……とは言えなかったが、話を終えたタクマは王都のコラル邸に戻るのがだった。



一方その頃。

ヴェルドミールの各国の王達は混乱の極みにあった。

何せ、世界を管理する神であるヴェルドが顕現し、警告を与えたのだから。

幸いこの世界は神への信仰が染み渡っているために、ヴェルドの言葉に疑いを持つ者は少ない。

こうして各国の王達は、禁忌魔法の調査・研究をやめた。すべての資料や研究結果は確実に処分されていく事になった。

各国の王は同時にこう思った。

((マジルの馬鹿め！ 余計な事をしやがって!!))

2 通告とコラル邸でのお説教

世界中の政治の中核でヴェルドが顕現した直後。混乱しているマジルの全域にいる民達、残された貴族達に念話が届いた。

『魔法国家マジルに住むすべての皆さんに報告があります。私はヴェルドミールの神、ヴェルド。』

現在、あなた方の国で起こっている混乱は、私の意思によるものです。今回、王を含めた大半の貴族を粛正した理由は、その者達が禁術を使い、世界の危機を引き起こす寸前だったからです。私は

危機を回避するために、マジルの王を含めたすべての関係者を神罰によって粛正しました。ただ、民である皆さんと、一部の貴族には罪はありませんので、手を出しておりません。これからあなた方は大変な苦勞をする事になるでしょうが、協力して真つ当な国作りを行っていただきたく思います。あなた方の生きる力を信じて見守っておりますよ……』

念話を聞いた民達は、国王が神の怒りに触れて粛正されたと理解する。ただし、国王が好戦的かつ卑しい人間だと知っており、死んだ事を好ましく思っている者も多かった。またその一方で、国の権力者が一氣にいなくなつた事で、不安に思う者も少なくなつた。

民達と同じ念話を受け取つた貴族達は心を痛めていた。そして、このまま混乱を放置すれば国が崩壊すると判断して、行動を開始した。私財を投入して各地を回り、不安に包まれている民をまとめて国を維持していくその一步を踏み出したのである。彼らの贖罪はこうして始まつていくのだつた。



パミル王都のコラル邸の応接室で、タクマとコラルが話をしていた。

「なるほどな。君が怒つて即座に行動した理由は分かつた。だが、せめて私に言つてからにしてほしかつたな」

「はあ……お言葉を返すようですが、言つたところで何かできたのですか？ コラル様には申し訳ないですけど、あの時は本当に時間との勝負でした。コラル様に報告し、国を通してマジルに警告して……どのくらいの時間を必要としたでしょうか？ 初めに言いましたが、俺が知つた時にはすでに危機的な事態でした。その状況で国に頼っていたら、彼らはどうなつていたんでしょうね」

タクマはコラルの言葉に強く反論した。

国としてマジルに抗議を行うとしても、証拠を揃え、人を使いに出し、交渉し——そんな無駄な時間を過ごしていたら、リュウイチ達は証拠隠滅のために殺されていただろう。タクマはパミル王国に報告した事で起こる時間のロスを考慮して、単独で乗り込んだのだ。

「確かにタクマ殿の言う通りだが、遠話で言ってくれても良かったのではないかと？ 元より、タクマ殿を止める権限はこちらにはないのだ。せめて話だけでも聞かせてもらえれば、国としても違つた対応ができたはず」

コラルは国の都合ではなく、純粹にタクマの立場を心配して言つていた。その顔には、タクマの事を心から思つている表情が浮かんでいた。

「タクマ殿が正しい事をしたのは分かつている。だがな、それとすべて自分で抱え込むとは違ふ。君には大勢の家族がいるし、何よりまだ幼い子供がいるのだ。君に勝てる者がほとんどいないのも本能では分かるのだが、君は神ではないだろう？ 万が一という事もある。その時、残された君の家族達はどうなる？ 即座に行動するのも良いが、ちゃんと考える事も大事だと私は言いたい」

「……」

タクマはとても驚いていた。ここまで心配してくれる存在が身近にいる事を。しかも、彼の息子を処刑する原因になった自分を心配してくれているのだ。

タクマが旅を始めてすぐの頃に出会ったコラルの息子であるミークは、領民を攫^{さら}つて乱暴していた。タクマがそれを暴^{あら}いた事でミークは死罪となったのだ。コラルからすれば、タクマは息子の仇である。コラルとは長い付き合いだが、そうした事情もあって、タクマはコラルとは何処か一線を引いていた。

微妙な顔をするタクマを見たコラルは、厳しい表情を崩し笑顔で口を開く。

「どうしたのだ？ 私が君を心配するのが不思議か？ 確かに君は私が息子を処刑するきっかけを作った。だがな、それは息子が愚^{おろ}かだっただけで、君を恨^{うら}む気はまったくない。むしろ感謝の方が大きい。君が捕らわれた民を助けた事もそうだが、それ以上にトーランの民にとっても君は恩人なのだ。君が安く譲ってくれたポンプは町全体に普及し、民の労力を大幅に軽減してくれた。その分の労力を仕事に向けた事で生活も潤^{うる}っている。分かるか？ 君が私にしてくれた事は、町全体の発展に力を貸してくれた事と同義なのだ。まあ、それ以外にも美味^{うま}い酒を納入してもらっているな！」

豪快^{ごうかい}に笑うコラルを苦笑いで見つめ、タクマは素直に詫^わげる。

「コラル様。申し訳ありませんでした。あの時行動する事は止められなかったですが、コラル様に

は報告だけはしておくべきでした。それと、俺の事を心配してくれてありがとうございます」

「良いのだ。結果的に全員無事だった。まあ、今回の話は終わりにしよう。あとは各国がどう出るか静観するだけだしな。それよりもせっかく時間ができたのだ。酒に付き合ってくれ」

コラルは使用人を呼び、酒の準備を指示する。

タクマもこの日ばかりはコラルに付き合い、翌朝まで酒盛りをするのだった。

3 押しつけ

コラルと酒を酌^{しやく}み交わしたあと、タクマは客間に案内されて眠っていた。



「またか……俺の夢は俺のものなんだけどな……」

「申し訳ありません。なるべく早くお知らせしなければと思って」

ヴェルドは申し訳なさそうな表情で、タクマの前にいつものテーブルセットを出す。そして椅子に座るときっそく本題に入った。

「まず、顕現する事を言っただけでなくてごめんなさい。ですが、タクマさんに国からの疑念が集中するのは申し訳なかったので、あのタイミングで出るしかなかったのです」

「それに関しては問題ありません。お陰でパミル王も理解を示してくれましたから」

「そうですね。パミル王国の判断はすでに知っているでしょうから、それ以外の国の話をしましうか」

「そう言っただけでヴェルドが話し始めたのは、各国の対応についてだ。」

ヴェルドの顕現後、各国では最優先事項として禁忌魔法・禁術に関連した発掘・研究を放棄、記録の類は教会に預ける事になった。それに加えて、すべての関係者にヴェルドと契約を結ばせられた。内容は、今後禁忌魔法と禁術に関連した研究は禁止というものだ。これに違反した場合は、関係者全員が神罰を受けるといふ。

「そんなわけで、今まで研究した成果や資料はすべて教会で保管する事になりました。まあ、教会に保管された瞬間に私のところへ送るつもりですが。すでに地上に存在している魔法に関しては、私が厳重な封印を施しておきます」

警告を受けた各国の王達は、最優先事項として行動を開始しているようだ。

「どのような禁忌魔法や禁術があるかは知りませんが、リュウイチ達のような被害者を出さないためにも当然の処置ですね。ところで、大丈夫なのですか？ 顕現するのはヴェルド様にもかなりの負担があったのでは？」

タクマはヴェルドの体が心配だった。

「あのくらいの顕現であれば大丈夫です。ただ、神罰を実行したのは相当負担がありました。しばらくの間、顕現する事は不可能でしょう。ただし神罰を行わなければいけない場合は、どんなに負担があつたとしてもやらねばなりません」

「しかしマジルが実際に神罰を受けた事で、軽く考える事はできないでしょうね。だからこそ、最優先で行動を開始したのでしょから」

「ええ、これでひとまずは安心でしょう。ただ、一つ惜しい事もあるのです。禁忌魔法や禁術の中には生活が潤うようなものも多いのです」

ヴェルドの話聞きながら、タクマは嫌な予感を覚えた。

「はあ、その後はあまり聞きたくないのですが……」

「そう言わずに聞いてください。私の方で危険のない魔法を厳選してタクマさんに使ってみてもらおうかと思うので……」

「お断りです！」

「食い気味に断られた!?」

タクマは失礼を承知で断った。今でも十分危険な存在なのに、これ以上ヤバイ奴にはなりたくないのだ。

「待ってください！ ちゃんと厳選して渡しますから！」

「正直言って、俺がもらってもあまり意味がないですよ。今でも便利すぎる能力に振り回されているのですから」

そう言って断ろうとしたのだが、一つ思いついた。

（ん？ そうか、危険なものでなければいつらに試してもらおうのもありだな。人身御供ひとみこぐみたいになつてしまいが、能力に不安があるからメリットも大きいだろう）

「ヴェルド様。一つ提案なのですが……」

タクマは自分の考えをヴェルドに話していく。すると彼女は少々考えた後に、パッと笑顔を咲かせた。

「それはナイスアイデアです!! 渡すものは人を傷つけるものではありませんし、彼らならタクマさんの近くにいるので問題ないですね」

タクマ達は同時に目を合わせ笑いだす。

「ふふふふふふ……」

そんな会話をタクマ達がしている頃、タクマの集落にいるとある一家は、タクマとヴェルドに厄介事を押しつけられそうになっているのを感じ取ってか、寝ながら身震いをしていたが――
それはさておき、ヴェルドが言う。

「ではその方向でいきましょう。選んだらお知らせしますので、あの方達を連れてきていただけますか?」

「ええ、できれば彼らの能力に合ったものをお願いしたいですね」

「任せてください! 必ず彼らの力になるものを選んでみせます!」

ちゃっかり身代わりを作ったタクマは、アイテムボックスからお茶請けとティーセットを出して、ヴェルドが帰るまでの時間を過ごす事にしたのだった。

4 Sランクへの依頼

いつも通り朝早くに目を覚ましたタクマは、ヴァイスと共に庭に出てスキンシップをしていた。ヴァイスも久しぶりにタクマを独り占めできたためか、上機嫌だった。

「早いな。ヴァイスと君は本当に仲が良いな」

声のする方に顔を向けると、コラルが寝間着姿で立っている。

「おはようございます。ヴァイスは俺の大事な相棒あいぼうで家族ですから。それよりもコラル様は眠そうですね」

「まあ、寝起きだしな。この後、応接室で少し話したいのだが良いか?」

「ええ。これといってする事ありませんし、大丈夫です」

コラルは頷いて自室へと戻っていった。30分後、タクマは応接間に先に行つて待っていると、身

なりを整えたコラルが現れる。

「すまんな。話というのは空間跳躍空間跳躍についてだ。あの魔法は何処にでも行けるものなのか？」

「そうですね。基本的には何処にでも行けます。マジルへの移動もそうでしたから。まあ、知らない場所に移動する場合は、行きたい場所の位置をしつかりと知っている者が必要ですが」

タクマは空間跳躍についてザックリと説明する。タクマはこの世界の人間ではないのもあって、国や町の位置が分かっている。マップに集落の位置は出るが、行った事のある場所以外は詳細は分からないのだ。だから、初めての場所に跳ぶには詳しい位置を知っている者が必要だった。

「何処か行きたい所があるのですか？」

空間跳躍について聞きたいという事は、何処かに行きたいのだろう。そう思って聞いてみると、その通りのようだ。

「ああ、まだ先になるのだが、教会の総本山に行く事になる。私は国の特使として行かねばならないのだが、道のりが大変なのだ。行くのは構わないが、長期間トールランを空ける事に不安があつてなできれば依頼として頼みたかったのだ」

「なるほど。コラル様を送り迎えるくらいなら大丈夫です」

「いや、ただの送り迎えではなくてだな……Sランク冒険者として護衛を頼みたいのだ」

そう頼まれても、タクマは気が乗らなかつた。厄介事の予感しかないし、そもそもタクマの冒険者資格は偽装用。あまり表立って冒険者としては活動したくないのだ。

「どうか頼めないだろうか？ 君がいれば経費も少なくて済むし、何より安全だろうか？」

コラルにとつて自分の安全を確保するには、タクマは最高の護衛といえる。戦闘能力が高く、強い守護獣までいる。それに加えて、世界に一人しかない空間跳躍の魔法の所持者だ。

「そうですね……帰ってみんなと相談してからで良いでしょうか？ 受けるかどうかは分からないですけど……」

「ああ、それで構わない。家族とよく話し合つて決めてくれ。報酬などの細かい事は、受けると決ましてから話そう」

相談事が終わると、タクマは王都ですべき用事はもうないので、ヴァイスと共に湖畔の自宅へ帰る事にした。コラルは王都に残るらしい。帰る時は遠話のカードで連絡をもらおうという約束で、タクマ達だけ帰った。



「おとうさんだー！ おかえりー！」

自宅に戻ると、食事を終えたばかりの子供達がタクマ達を迎えてくれた。ゲール達も嬉しそうに迎えてくれる。

「ああ、ただいま」

近くに寄ってくるゲール達や子供達を撫でてから、リュウイチ夫妻を呼び出してもらう。

「出掛けていたんですね。おかえりなさい」

「ただいま。ちょっと話があるんだ」

タクマは二人に座ってもらい、話を切り出した。夢の中でヴェルドと話した内容を、二人に話していく。

「はあ……話は分かりました。ですが、禁忌とされている魔法や禁術を、僕達がもらっても大丈夫でしょうか」

「それに関しては、ヴェルド様がお前達に合ったものを厳選してくれるそうだ。危険なものはないと思うぞ」

タクマの言葉に、二人は言いにくそうに話し出す。

「タクマさんがそう言うなら大丈夫でしょうが……ヴェルド様ってちょっと抜けているような印象があるんですよ……」

リュウイチは、ヴェルドが選ぶ事に不安があるようだ。

「タクマさんが選んでくれるんだったら普通に安心できるんですけど」

「確かにヴェルド様はちょっと残念なところはあるけど、お前達にマイナスな事はないと思うんだがな。まあ不安は分かるから、いきなり付与をするのではなくて、決まった時点で俺が確認するよ」

「それだったら安心かもしれません。タクマさんに任せきりで申し訳ないんですけど、僕達には何が危険か判断できないので」

タクマはしっかりと確認する事を約束した。

「でも、良いのですか？ タクマさんがもらえば良かったんじゃないか……」

「これ以上化け物にはなりたくないんだよ。ただでさえ力を抑えるのに必死なんだ。禁術なんでもらったら身に余るよ」

そう言ってタクマは、二人に能力の付与を了解させるのであった。

5 大人会議と二柱再び

タクマは二人に能力の付与を了解させたところで、主要な住人を集めてもらった。カイル、ファリン、カリオ、アークスの四人だ。

「なんだよ。また面倒事か？」

元暗殺者のカリオは、「面倒くさそうにタクマを見る。

「そうだな……うん。ちょっと面倒な依頼を相談された。最悪みんなにも関係する可能性があるから話しておこうと思ってな」

タクマはコラルから説明された事をみんなに話していく。メルトの村出身の元門番で、先日タクマの家に住むようになったばかりのカイルが口を開く。

「なあ、異世界人のお前が教会の総本山に行くのはまずくないか？」

カイルの言葉にカリオも同意する。

「そうだぜ。言うなれば、ヴェルド神に加護を受けているのが明白な奴が、ヴェルド神の信仰をしている中核に行くわけだろ？」

更に執事のアークスト、カリオの妻のファリンも言う。

「タクマ様。教会の総本山では、ヴェルド様の加護を持つ者がいないそうです。そんな中、加護を受けているタクマ様やヴァイス達が行くと、祀り上げられる可能性があります」

「私達にも絡んでくる可能性があるわね」

四人の意見を聞いたところで、タクマが口を開く。

「やっぱりそうだよな。俺自身も嫌な予感はあるんだ。だから俺一人で行って、みんなの安全は、精霊のアルテとヴァイス達に任せようと考えてる。俺自身は単独でも大丈夫だろうし」

自分の見解を話すと、カイルが口を挟んだ。

「それをヴァイス達が納得するのか？ お前単独で危険な場所に行かせるのは、絶対に反対するだろ。せめてタクマの腕に隠られるレウコンくらい連れていくとかしらないと」

「確かにそれは言えるか。後で相談する事にしよう。今回はコラル様の護衛依頼なんだ。今、世

界の情勢は若干混乱しているだろうから、強い護衛が必要らしい」

情勢が混乱していると云ったところで、全員に「その原因を作ったお前が言うな！」的な目を向けられたが、華麗にスルーして話を続ける。

「教会の総本山に俺が行くのは確かに危険だ。だが、俺達が世話になっているトーランの領主であるコラル様の事を考えると、行くしかないと考えているんだ。コラル様は自分の仕事と、俺が丸投げした仕事で忙しいだろうからな。空間跳躍を使用して早く終わらせてあげたいんだ」

タクマがそう言うと、コラルには全員世話になっている自覚があるらしく黙ってしまった。誰も口を開けなくなった状況で、アークスが言う。

「タクマ様、この依頼はまだ先なのですよね？ でしたら、しっかりと時間を使って話し合いますよ。今日はこの辺で切り上げませんか？ 煮詰まっても良い案は出ませんし」

「そうだな。みんなもそれで良いか？ それぞれ良い案を考えてみてくれ。俺はリュウイチ達を連れて、これから教会に行ってくるよ」

それぞれが次の話し合いまでに案をまとめるという事で解散となった。

話が終わってトーランへと移動したタクマとリュウイチとミカはそのまま礼拝堂へ行った。タクマは予め二人に注意をしておく。

「今度の付与は通常の能力とは違うものだ。力を得たからといって馬鹿な真似はしないでくれよ」「大丈夫です。僕達もガキではないですから。調子に乗ったりはしませんよ」

「タクマさんを怒らせる方が怖いわ」

「……まあ、分かっているならいいか。付与される前にどんな能力か確認はするから、その辺は安心していてくれ」

「はぐ」

タクマ達はヴェルド像の前に片膝をついて祈りを捧げた。



いつもの空間に移動したのは良いのだが、タクマ達の目に、ヴェルドが正座をしている光景が飛び込んできた。

ヴェルドの前には二つの影がある。

「……」

「タ、タクマさん。見間違いでなければ神様が正座して説教……」

「言うな……俺もびっくりしてる……」

ヴェルドミールの民が見たら卒倒するような光景に、タクマはため息を吐きながら近づいていく。「タクマさんよくいらっしやいましたね。あなたもヴェルド神の隣にお座りなさい」

そう言うてにっこりと笑ったのは鬼子母神。彼女に促されるまま、タクマはヴェルドの隣に正座

をした。

もう一つの影、伊耶那美命いざなみのみことは驚いているリュウイチ達に向かって優しく話しかける。

「あなた達とは後ほどお話しさせていただきますから、あちらのテーブルでゆっくり待っていてもらえますか？」

「は、はい！ 分かりました……」

リュウイチ達が離れていくと、鬼子母神様が口を開いた。

「あなた達とは、すこしお話をしないといけませんね」

二柱は目だけ笑っていない表情で、タクマとヴェルドを見据えるのだった。

「は、はぐ……」

6 お説教

「まったく、たとえ器に合った能力を渡すからといって、禁忌・禁術に指定している魔法を押しつけるとはどういうつもりです。戦闘向きではないとはいえ、使い方によってはとても危険でしょう。その辺は考えたのですか？」

鬼子母神はため息をつきながら、タクマとヴェルドに語りかける。

ヴェルドは委縮いじやくしてしまっているようでオロオロとするばかりだ。仕方がないので、タクマは自分の考えを述べる事にした。

「確かに、安易に禁術指定されたものを押しつけようとした事に関しては認めます」

タクマは押しつけようとした事をあっさりと言状した。どうせバレているのだ。隠すだけ無駄と諦めて、正直に認めた方が良いと判断したというわけである。

「ですが、ヴェルドミールに来た時点で、そちらの世界には戻れないですよ？ だったら不安に思う彼らには、まずは力が必要です」

それからタクマは次のような事を話した。

ヴェルドミールは日本とは違い、命を落とすリスクが相当に高い。町から出なければそこまで危険ではないが、身を守るにはヴェルドから授けられた能力では足りない。そこに、ヴェルドから禁忌魔法や禁術のスキルを渡すという話を持ちかけられたので、その中から使えそうなを厳選して彼らに渡そうとしていたのだ。

一通り聞いた鬼子母神が頷いて言う。

「タクマさんとしては自分に面倒が来るのも嫌だったけど、危険の少ない能力であれば彼らに与えても問題がないと判断したと」

「ええ、彼らは私の所で住む事ですし、問題ないと判断しました」

タクマは自分を落着かせながら意図を話していく。その間ヴェルドはといえば、タクマに説明

を丸投げして俯いていた。

「なるほど。言われるまでもなく、考えたうえで判断ですか……」

「確かに、自分に降りかかる面倒事が嫌だという気持ちはありましたよ。だからといって、何も考えずに提案するわけではないでしょう」

そう言ってタクマは鬼子母神の目をしっかりと見る。

「嘘はない目をしていますね。だったら何で、ヴェルド神と一緒に悪巧みをするような怪しげな雰囲気醸し出していたのですか？」

「ノリ……ですかね」

「紛らわしい事をするから私達が来たのです。普通に話していれば問題ないではないですか」

鬼子母神はため息を吐きながらタクマを見る。

「タクマさんの考えはちゃんと理解できました。危険に関しては自分が対応する気だったのも聞けて良かったです。対応策も考えていたようですから、これ以上は言うのをやめましょう。タクマさんに対するお説教は終わります」

立ち上がるように促されたタクマはしびれかけた足で立ち上がり、リュウイチ達の方へ歩いていった。

「さて、ヴェルド神。あなたはタクマ殿に説明を任せるとはどういう考えなのですか？ 神であるあなたが人であるタクマさんの陰に隠れて説明をしないなど駄目でしょう」

鬼子母神は懇々こんこんとヴェルドを諭していく。自分が守るべき民の後ろに隠れているなどあつてはならないのだ。

じつくりとヴェルドが叱られているのを横目にしながら、タクマはリュウイチと話し始めた。

「ああ、びつくりした。まさかこの歳で正座をしてお説教とは……」

「まあ、仕方ないんじゃないですか？ 押しつける気だったのは事実だったんですから」

リュウイチは複雑な表情をしている。結果的に見れば、自分達の存在も怒られる理由になつてしまつたのだから。

「まあ、お前達に力が必要なのも事実なんだ。禁忌とされている魔法にしろ、禁術にしろ、所詮は力ではないんだ。よく言うだろう？ 力は力ではない。使う者の気持ち一つで危険なものにも便利なものにもなるって」

苦笑いしながら話すタクマに、リュウイチ達は大きく頷いた。

「そうですね。地球でも同じような考えはありましたね。使う者がしつかりとした判断で使用しなければ、安全なものでも命の危険が出てくる可能性はありますし」

リュウイチが力についてしつかりと分かつてくれた事に安心していると、鬼子母神の傍で厳しい表情をしていた伊耶那美命がタクマ達に近寄つてきた。

「あちらはもうしばらくかかりそうです。ですので、こちらに座つても良いでしょうか？」

「どうぞ」

「ふう、怒るのも疲れます……あ、自己紹介がまだでしたね。私の名は伊耶那美命。あなた達がいた日本の神です。今回は大変な目に遭われましたね。助ける事ができずに申し訳ありませんでした」

伊耶那美命の名を聞いて二人は固まつてしまった。それからリュウイチは、すがるようにしゃべり出す。

「あ、あの！ タクマさんやヴェルド様に言われてはいるのですが、本当に僕達は帰れないのでしょうか」

伊耶那美命はとても悲しい顔で答える。

「とても言いにくいのですが、こちらのヴェルドミールという世界からあなた達の住んでいた日本へは戻る事ができません。これは世界の存在しているレベルに関係しています。ヴェルドミールという世界は地球のある世界よりも低いレベルなのです。上から下には行けるのですが、逆は無理なのですよ」

「で、でもー！」

「私達がここに来る事ができるのに、とお思いですよ？ 私達は実体ではないのです。見てください」

そう言って伊耶那美命は自分の手を見せる。すると、その手が透けているのが分かった。

「神の力を器うつわにして意識をこちらに飛ばしているのです。なので、生身のあなた達が戻る事は無理なのです……」

悲しそうな目で申し訳なさそうに語りかける。

リュウイチとミカはその姿を見て、自分がどれだけ無茶を言っているかを理解しようだった。

「すみません……僕達自分勝手な事を……」

「ごめんなさい……」

「お気になさらないでください。あなた達がそう言うのは分かります。誰だって故郷に帰りたいのですから」

お互いに頭を下げ合っていると、ようやくヴェルドへのお説教は終了したようだ。

スツキリとした様子の鬼子母神とは反対に、ヴェルドの表情は疲れ切っていた。

鬼子母神がリュウイチ達の表情を見て言う。

「あら。その様子だと話したようね。伊耶那美命から話は聞いたと思いますから、私からはありません。今度はヴェルド神が仕切っていくのですよ」

長い説教も終わり、ようやく本題であるリュウイチ達の能力付与へと移る事になった。

7 新たな能力

鬼子母神に促されたヴェルド様は、気を取り直して話し始めた。

「さっそくですが、リュウイチさんとミカさんには、この世界で禁術に指定されている能力を付与させていただきます。ただ、あなた達が先日得た能力を生かすようなものを厳選しました。まずは資料を見てください」

ヴェルドは、二柱、タクマ、リュウイチ夫妻に、羊皮紙のような書類を配り、説明を始める。

「まずはリュウイチさんです」

リュウイチに用意されたのは、生産に特化した能力——金属加工（極）だった。

金属加工スキルは、レベルによって金属を加工しやすくなるが、この（極）はすべての金属を加工可能なうえ、加工途中で属性魔法を付与できる。

通常は、金属加工を終わらせてから完成品に付与を行うが、このスキルなら制作途中でも素材自体に属性を付与できるようになる。そうすれば、完成時にも更に属性を重ねられるようになるらしい。ただ、加工中の属性付与は、膨大な魔力を必要とするため、現時点では使えない。

「リュウイチさんはまだこちらに来たばかりで、魔力が足りないでしょうから今の時点では危険な

スキルではありません。しっかりと力をつけ、勉強をしてから使えば危険なものではないです」

資料にも危険はないと書いてあるのだが、一つ気になる点があった。

「この資料には、加工時に属性付与を行って完成時に更に重ねがけを行うと、神器じんぎまではいかなくともそれに近い能力になるとあるのですが」

「それは、リュウイチさんが能力を十全じゅうぜんに使いこなす事ができた場合です。加減さえすれば、流通している武器や道具よりもちょっと強い程度に抑えられると思います」

自重じちゆうしなければ危険な武器を作る事も可能だが、力を使いこなせて調整できれば問題ない能力という事らしい。

「どうだ？　かなり強力な能力ではあるが、そこまで危険ではないんじゃないか？」

そう尋ねると、資料とにらめっこをしながら聞いていたリュウイチは顔を上げる。

「はい。タクマさんが言ったように、力の使い道さえ間違えなければ大丈夫だと思います」

リュウイチはもらう能力に納得をしたようだ。

続いてミカの番である。

「ミカさんに与える能力なのですが、正直ミカさんの素質に合うものではありませんでした。でもミカさんは、タイヨウ君の事とタクマさんが引き取って育てている子供達の事を、いつも大事に思っています。ですから、ミカさんには神聖結界しんせいけいという能力を与えます。これにはスキルレベルと呼べるものではありません。タクマさんが使う結界の下位互換に値するものです。タクマさんの結界は人

や物すべてを範囲指定できますが、こちらは生物のみにかける事ができます。子供達を守りたいミカさんには一番良い能力だと思います」

資料を見てみると、神聖結界は悪意や殺意を持って近づいた者を雷撃で気絶させる事ができることあった。また、神聖結界をかけられている者達の位置が直感で分かるようになるそうだ。使用魔力はそこまで多くなく、リスクは少ない。ただし問題があつて――

「ヴェルド様。ミカに与える神聖結界は、かなりのリスクが伴いますね。その名の通り神聖な能力なので教会に知られると、俺同様に目をつけられる可能性があります」

「ええ、ミカさんにはその可能性が出てしまうので、私からもう一つ能力を与えます。それはステータス隠蔽（極）です。通常のステータス隠蔽では、鑑定のレベルが（大）だった場合にバレる可能性がありますが、（極）であればバレる事はありません」

確かにステータス隠蔽（極）があれば、ヴェルド様の言う通り大丈夫そうだ。タクマはミカの方に顔を向ける。

「俺はスキル隠蔽がセットであれば、リスクも少ないと思うが……」

「ええ、バレないようなスキルがあるならば、もらっても大丈夫だと思います」

タクマの意見にミカも了承してくれた。

タクマ達を静観していた鬼子母神が頷きながら、ヴェルドに言う。

「しっかりとリスクも考えた選択でしたね。だったら尚更あのようなやり取りは必要ないじゃないで

すか」

「は、はい……申し訳ないです……」

ヴェルドはノリで、タクマと悪巧みをするようなやり取りをしてしまった事を反省しているようだ。二柱に恐縮しながらリュウイチ達に話しかける。

「お二方とも納得してくれたようなので、さっそく付与を行います。ただ、どちらも強力な能力なので多少の苦痛を伴いますよ。覚悟はできていますか？」

「は、はい！」

二人ともタクマに予め言われていたので即答だった。

ヴェルドは二人の頭に手を翳して付与を始める。ヴェルドの手が光り、二人の体に光が吸収されている。そんな光景を見ると、二人が脂汗をかいているのが分かった。辛うじて立ってはいられるが、相당한負荷がかかっているようだ。

数分その光景が続き、終わる頃には二人ともクタクタに疲れ切っていた。

「はあ！ はあ！ はあ！」

肩で息をする二人に、ヴェルドは優しく語りかける。

「付与は終わりました。これであなた達も強大な力を得ました。ですが、力に溺れる事なく平和に暮らしてくださいね」

「はい……あ、ありがとうございます……」

そして、タクマがこれでようやく終わりかと思っていると、予想外の言葉が二柱から発せられるのであった。

8 タクマ、種族が変わる

鬼子母神はタクマの方へ顔を向けて口を開く。

「さあ、お二人の能力付与は終わりました。次はタクマさんの番ですね」

「はい？」

タクマは思わず間拔けな声を出してしまった。

「危険なものではなかったですけど、二人にリスクを負わせたのです。あなたも多少なりともリスクを負わねばなりませんよね」

二柱は、タクマが今何回のリスクも負わなかったのをお気に召さないようだ。

鬼子母神はヴェルド様に話を振る。

「ヴェルド神。お二人をターゲットにする前は、禁忌魔法や禁術の扱いはどうするつもりだったのですか？」

「は、はい！ 当初の考えは、あまりに危険なものに関しては私が責任を持って処分する予定でし

た。ただ、生活に役に立つものや人のためになるものは、タクマさんに託そうと考えていました」
「タクマさんに丸投げするつもりだったのですね。では当初の予定通り、比較的安全なものをタクマさんにお任せしてはどうでしょうか？」

「私としては願ったり叶ったりですが、タクマさんはこれ以上の能力を望んでいませんし……」

ヴェルドはタクマの不安を知っているので、無理やり付与する気はなかったのだが。

「ですが、タクマさんも自分で言っていたでしょう？ 力は力ではないと。使いどころをしつかりと分かっていたら、能力をたくさん持っていて問題ないはずですよ。そうですね？」

鬼子母神はタクマの方へ顔を向け同意を求める。

鬼子母神の言葉は、タクマがリュウイチ達に言っただけで聞かせた事だった。自分で言った事が自分に返ってきてしまった形になる。

「そうですね……その通りです……」

タクマは同意するしかなかった。

「タクマさんもそう言っていますし、託せるものは託してしましましょう。どんなものを託そうとしていたのですか？」

鬼子母神と伊邪那美命は、ヴェルドと付与する能力を話し始めた。

タクマはため息を吐いて思案する。

（これで俺も化け物か……ただでさえ能力がありすぎて使いこなせていないのに……とりあえずや

るべき事を終わらせたらどっかで修業でもしよう。そうしないと力に振り回されそうだし）

タクマは、話し合いの間に、自分の行動を決めた。

数分後、三柱はタクマの方に向き直った。代表して伊邪那美命が口を開く。

「お待たせしました。タクマさんに付与する能力は、あくうかん垂空間作成、空間制御、大気制御の三つになりました。そして、レベルは最大で付与する事にしました」

そう言っ、タクマが拒否する暇を与えずに説明が始まる。

垂空間作成は、今タクマ達がいる神の領域と似た空間を作る能力。スキルレベルによって作れる大きさが異なり、タクマの場合は制限なく広い空間を生み出せる。ただこの能力は空間を維持するために常に魔力を消費する。この使い勝手の悪さによって、禁術として放棄された能力らしい。

空間制御は単独では意味をなさず、垂空間作成と合わせて持つていないと使いようがない。作った空間を固定し、魔力を消費せず存在させ続けるという。何故か垂空間作成とは違う場所で発見されたため、無意味な力として放棄されたようだ。

最後に大気制御。これは気体すべてを制御できる能力だ。とある国家の軍が研究していたかなり不安定な禁忌魔法で、暴走する場合もあるとの事だった。

説明が終わってタクマが感じた事は、「でたらめ」の一言に尽きる。

「これは人間の扱える代物ではないのでは……」

タクマが言葉に詰まりながらも三柱に尋ねた。するとヴェルドが話し出した。

「タクマさん。あなたはすでに通常の人という種族を超えてしまっていますので、その三つの能力を与えても問題はないと判断しました。ただ、タクマさんは人としての器で生きています。すでに不老ではありませんが、不死ではありません。何かのきっかけで殺されてしまったり、事故で死んだりする可能性はあるのです。簡単に言えば仙人みたいなものでしょうか」

「どうやらタクマは自分の知らないところで、人としては逸脱した存在になっていたようだ。」

「そうか……俺はすでに人族ですらなかったのか」

「それを気にする必要がありますか？ 見た目は人ですし、あなたの感覚もまた人と同じでしょう？ ヴェルドミールにはたくさん種族がいます。今更種族が増えたからといって気にする必要はありません。また、タクマさんを鑑定できる存在は、私達神とタクマさん自身しかいないのですから」

「そうか……新しい種族になったと思えばいいのか……分かりました。受け入れる事にします」

タクマがすべてを呑み込み了承すると、ヴェルドは微笑みながらタクマの頭の上に手を翳すのだった。

9 半戦神 はんせんじん

付与が終わったようなので顔を上げてみると、ヴェルドはタクマを見て言葉を失っていた。タクマは彼女が呆然としている理由が分からなくて首を傾げる。

「どうかしましたか？」

タクマが勇気を出して声をかけると、ヴェルドは明らかに挙動不審になっている。

「い、いえ……自分で鑑定すれば分かる事なのですが……タクマさんは人の器を持ったまま神の領域へ足を踏み入れてしまったようです」

タクマはヴェルドの言葉に固まってしまった。種族が変わると言っても、そこまでの変化だとは思っていないかった。

「神の領域……？ どういう事でしょうか？」

「まずは、タクマさんの種族を教えますね。種族名は『半戦神』。その名の通り、半分神の領域に入っているという事です。タクマさんが持っている能力の多くが戦闘寄りな事で、戦神の扱いになっていますね。まだ、『半』が付いている事で神としての力は行使できませんが、このまま数年間成長を続ければ本当の戦神まで昇り詰めるでしょう」

「どうやら強さが更に上がった事で、神に近い存在になってしまったようだ。ただ、あまり今までと変わったところはなく、人としてヴェルドミールの地で暮らすのも問題ないらしい。ちなみに神へと進化するには条件があり、今のタクマでは不可能なのだそうだ。」

「一つだけタクマさんの体に変化があります」



そう言ってヴェルドは手鏡を取り出す。鏡を手渡されたタクマは、自分の顔を映して確認した。「なるほど、これはちよっと目立ちそうだ……」

変化があったのは目だった。

今までは黒目だったのが金色の目になっている。タクマの髪の毛は黒髪なので、目との対比が激しくとても目立つ。

「タクマさん、その目は魔力を抑える事で色を戻せます。試しに魔力を抑えてみてください」
言われるままに魔力を抑えていく。

「そのくらいで大丈夫です。黒い目になりましたよ」

タクマが鏡を確認すると、いつもの黒目に戻っていた。

これまでは魔力を気にしなくても問題なかったのだが、目の色で目立ちたくなければ魔力をコントロールする必要が出てきた。

「ヴェルド様。とりあえず種族については分かりました。俺はこのままヴェルドミールで暮らしていいんですよね？」

「ええ、もちろんです。ここ最近、タクマさんを振り回してしまっていたのは本当にごめんなさい。タクマさんのお陰で、世界にとって一番危険だった召喚魔法は排除されました。これからは頼み事もなくすつもりでいるので、子供達とのんびりと暮らしてください」

「分かりました。ですが、本当に困った事があれば言ってくださって構いません。俺がここで暮ら

せるのはあなた方神様のお陰ですから」

「ありがとうございます。そう言っていただけると多少は罪悪感が減ります」

ヴェルドとの話が終わると、鬼子母神が口を開いた。

「タクマさん。あなたの種族が変わってしまった事に關して謝罪いたします。私達が付与させたせいで……」

「お氣になさらずとも大丈夫です。いつも言いますが、力は力でしかありませんし、種族が変わるのも初めてではありませんしね。むしろ生きるために必要な力を授けていただいて感謝しています」

「それだったら良いのですが……」

二柱はまだ納得できていないようだが、タクマはそこまで深刻には捉えていない。むしろ、不老の半神としてヴァイス達とずっと過ごせる事が分かり喜んでるほどだ。しかも便利そうな能力まで与えてもらったので楽しみが多くなった。

そんな事を考えていると、ヴェルドがタクマに質問をしてきた。

「タクマさんは怒っていないのですか？ 私と関わった事でいろいろ巻き込まれて、振り回されていますが……」

「怒る？ それはいいですね。確かに巻き込まれたり、振り回されたりはしますが、嫌々はやつてないですから。子供を救ってほしいと言われた時も、自分のできる範囲で救いたいと思いました。

タイヨウを保護してリュウイチ達を救出した事も、最終的にはすべて自分の意思でやると決めたんです。断る事もできましたが、俺はそうしただけ。なので、あなた方神を怒るなんて滅相もないです」

そう言っただけタクマは三柱に向けて笑いかけた。

三柱はようやく安心したようで、優しい笑顔に戻った。それから三柱は、タクマとリュウイチ夫妻に顔を向ける。

「今回のお話はここで終わっておきましょう。日本人同士、どうか仲良く暮らしてくださいね」

鬼子母神はそう言っただけで消えていった。

「では私からも。リュウイチさん達はこれから慣れない土地での育児が待っています。持っている知識、技術を以て立派にタイヨウ君を育ててくださいね。タクマさんも、種族の事は気にしないでヴァイス達と幸せに暮らしてください」

伊邪那美命は手を振りながら消えていく。

「二柱はお帰りになってしまいましたね。では、そろそろ戻る頃の様子です。三人ともしっかりと自分の能力を把握して暮らしてくださいね。私に話があれば教会でお話をしましょう」

そう言っただけヴェルドは、タクマ達を送り出してくれるのだった。

10 葛藤

無事に付与が終了した三人は、何処にも寄る事なくまっすぐ帰宅した。

リュウイチ達は疲れたようで自室へ戻っている。タクマもいったん帰宅したのだが、一人で祠へ移動した。誰もいない所で少し考えたい事があったのだ。

祠に着くとテーブルセットを出してコーヒーを淹れる。そしてコーヒーを一口啜り一息ついた。「ふう、半戦神か。いよいよ人でなくなったな……」

あの場では冷静に受け止めたつもりだったのだが、思いの外動揺しているようだ。カップを持つ手も少し震えている。

「確かに力は力ではない。力を得たからといって、ウチの家族達は変わらないと思う。だが、種族はどうだ？ 確かにこの世界にはたくさん種族がいる。俺自身は種族によつて人を判断する事はないが、他の人は違うかもしれない。しかも半分とはいえ、神と名の付く種族になつてしまった」

誰に語るでもなく独り言を呟くタクマ。そんな彼の前に、水の精霊のアルテとナジが現れた。

「どうしたの？ タクマが悩んでいるなんて。ヴェルド様の所で何かあったの？」

「アルテか。まあ、俺もたまには悩むさ。生きてるといろんな悩みは付き物だ」

「そうなの？ でも、一人で考えているって事は、話したくないの？」

そう聞くアルテに何と言って良いか考えていると、ナジが代わりに話し出した。

「マスター。私が説明してもよろしいですか？」

「ああ……そうだな。俺はうまく説明できないから頼めるか？」

タクマはナジに説明を任せた。

ナジはタクマの身に起きた変化について、アルテに細かく話していった。

ナジの説明を最後まで聞き終え、アルテが尋ねる。

「で？ リュウイチ達の能力付与をノリで決めたせいで、自分は更に多くの能力を付与された。そしてその結果、種族が変わって神の領域に足を踏み入れたと……馬鹿ねえ、真剣に話し合っていたら結果は違っていたかもね」

「返す言葉もない」

「それで、種族が変わった事を告白したら、みんなが怖がったりすると思ってるの？」

「そうかもしれないな。さすがに自分達とかけ離れた存在だと知られたら怖いというのもあるかもしれないから……」

「タクマは自分の家族を侮ってない？ あなたの家族はタクマだからこそ、ついてきてくれているのだと思うわ」

アルテはゆっくりとタクマに言い聞かせる。

「子供達だってあなたの本質を見て懐いているの。大好きなお父さんがどんな種族だって関係ないと言うでしょうね。思い切って言ってみたら？ 本質を見極める事に特化している精霊の私が言うのだから、きつと大丈夫」

アルテに言われて、タクマはようやく気づく事ができた。理解しているつもりだったのだが、実感したのだ。

タクマがみんなを支えているだけではなく、みんなもタクマを支えてくれている事に。

「そうか…：そうだよな。みんなは俺を信じてついてきてくれてるのに、俺が信じ切れていないんじゃない訳ないな。ありがとう、アルテ。今夜にでもみんなに話しておこうと思う」

「べ、別にお礼を言われるほどの事は言っていないわ！」

照れ臭そうにそっぽを向いたアルテは、少し赤くなっているようだった。

「も、もう、考え事はないんでしょ？ 戻りましょうよ」

「ああ、そうだな。帰ろうか。ナビもありがとう」

「いえ、私にとってマスターは親にも等しい存在なので、元気でいてほしいだけです」
普段クールなナビも照れているようで、少し赤くなっていた。

タクマは自宅に戻ってくると、さっそく行動に移すべくアークスを呼んだ。

「おかえりなさいませ」

「ただいま。あおき、今夜の食事はみんな揃って食べたいんだ。急だけど大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫です。いつも通り庭で行いましょう」

「ありがとう。その時、みんなに大事な話があると伝えておいてくれ」

アークスはさっそくみんなに伝えに行ってくれた。家に帰ってきていた子供達はタクマの様子が少し違っているのを感じ取ったのだろうか、傍を離れようとしなかった。

「お父さんどうしたの？」

「何か辛いのか？」

タクマは自分を心配してくれる子供達を優しく撫でてやる。祠でアルテと話した事を思い出し、思わず笑みが零れた。

「辛くないよ。心配してくれてありがとう。今日は庭でご飯を食べたら、俺の事をみんなに話そうと思うんだ。だから、ちょっとだけ緊張してるだけだよ」

「お父さんの事？」

「そう、みんなも俺の生まれた所や、どうやって生きてきたかを聞いてなかったら？ 良い機会だから、すべて話しておこうと思ったんだ。みんなの過去を聞いたのに、俺が話さないのも不公平だしな」

タクマは子供達にも分かるように、ゆっくりと噛み砕いて話してやる。